

沢井市造

さわい いちぞう



沢井市造

『澤井市造』より

沢井市造は嘉永3年(1850)丹後由良港に生まれました。幼少のころ両親を失い孤児となり、船乗りをしたりと放浪の末、たどり着いた北海道で、明治12年(1879)沢井組を興し、鉄道工事などで活躍しました。

北海道鉄道建設に尽力した鉄道局の松本壮一郎は「もし、沢井に学問があったらより偉い人間になると思うだろうが、それはまちがいで沢井は学問がないが故に天才を発揮することができる」と評したといひます。松本は沢井が請負業を興すのを援助した恩人でもありました。

数百人の衝突を制した大親分の采配

明治初期の土木建築業は、労働者たちをいわば親分子分の関係で管理するという側面があり、請負業者には任侠的な資質も必要とされていました。沢井は荒くれ者たちを束ねる任侠肌の大親分的な請負人として知られていました。

沢井の任侠風な采配を示す逸話があります。札幌に対立した二人の親分がいました。互いに反目し、ついに衝突寸前となり、両派の子分が数百人、竹槍、こん棒、猟銃まで持ち出して睨み合い、血の雨が降らんばかりの様相となりました。警察も鎮静できず遠くから警戒しているなか、沢井が現れてこう言いました。「喧嘩のおこりはもともとお前さん二人の確執からおこったことではないか。それなのに大勢の子分たちを巻き込んで、もし傷害や殺人がおこったら連中の妻子はどうなるんだ。二人で果し合いをしろ。およばずながらこの沢井が見届けてやろう、しかしだ、殺されて死ぬほうも成仏しろよ、勝ったほうも俺がただちにしとめてやるからな。」親分たちもこの道理には屈服せざるを得ず和解したといひます。

沢井市造の仕事

【明治23年 竣工】北海道炭礦鉄道室蘭線（北海道）

明治6年(1873)主に石炭の運搬を目的として敷設された幌内(ほろない)鉄道は、明治22年(1889)に北海道炭礦鉄道に払い下げられ民営化されました。その際、室蘭線などの新線が建設されることになり、沢井組は室蘭線の幌内太(ほろないぶと)から砂川間を請負いました。原生林を伐採し泥炭地に鉄道を築く難工事で、現場は人里から遠く離れた環境にあり、食事は米と味噌だけ、飯場は伐採した木を柱に熊笹を刈って屋根や畳とした粗末なものでした。この過酷な現場が、劣悪な環境で労働に従事させる「タコ部屋」の発祥となったといわれています。



明治中期の樺太(からふと)停車場。幌内鉄道は、採炭と北海道開拓の動脈となりました。



室蘭線に続いて請負った北海道炭礦鉄道夕張線で大損を出した沢井組は、下請けなどで一時代を過ごしたのち、台湾に渡り成功を納めました。日本での沢井組の仕事の多くは土木工事でしたが、台湾では台湾総督府台北専売局、台湾総督府台北庁舎など、建築工事も請負いました。沢井は台湾で人望を集め、台北消防組の頭取も務めました。

写真左上：台湾総督府台北専売局

写真左下：沢井組台北支店 『澤井市造』より

【沢井市造】参考文献

『澤井市造』(澤井組本店)

北海道建設新聞社・編 『風雪の百年 北海道建設業界史』(北海道建設新聞社)

菊岡俱也 『建設業を興した人びと いま創業の時代に学ぶ』(彰国社)